おひざのうえで 2022

（副園長の子育て応援通信）

６月「計れない力」

せんりひじり幼稚園　　副園長　安達かえで

乳幼児の教育保育は、何がいいのかわかりにくく、点数や数値で表すことが難しいと言われています。保育の環境や、保育者の関わりや、子どもの育ちの状況にあった保育内容など様々なものが絡み合って、子どもの育ちを支えていきます。ですから、このような保育をすればこのような子どもに育つといった公式の答えのような結果を得ることはできません。

ですが、ある程度の指標や評価基準があることで現場の保育の質の基準が保たれます。元同志社女子大学教授の埋橋玲子教授が、ECERS というアメリカで開発された保育の質を総合的に測定するスケール本を翻訳し、日本の幼児教育の環境評価に力を注いで来られました。評価の仕方は３５項目×１０～１４の評価段階を全てチェックし、複数の評価者（アセッサー）で、協議し合意の上で評価得点を決めていきます。例えば、保育室内の採光の有無や劣化の程度。衛生面や安全面。遊びと学びのための室内構成。微細運動や数や音楽に関するコーナーの有無。言葉や絵本や文字の環境と保育者の関わり。子どもどうしの関わり。粗大運動の設備や環境などなど・・・。

今回、その評価者トレーニングの一環としてせんりひじり幼稚園のゆり組で評価が行われました。大学の先生方や他の幼稚園の園長先生方 5 名と私も評価メンバーですので 6 名で評価を行いました。

ゆり組担任の福岡加菜は、埋橋先生の大学の教え子ということもあって「やります」と言ってくれて、保育室環境を整え、丁寧で素敵な保育を見せてくれました。埋橋教授も「全力で熱量満開に子どもに関わる姿が素晴らしい」と涙浮かべておられました。

評価をしていると、「評価では計れない」と感じるものが多々あって、保育の質を評価することの難しさを感じます。ゆり組の子どもたちが、歌を歌い始めると、嬉しそうにお互いの顔を見合わせて笑顔で歌っています。そして自然とみんなで肩を組んで体を揺らしながら歌っている姿から「仲間といることの嬉しさ」が伝わってきて「幸せ感」満載でした。でも、そんな評価項目はありません。また、給食当番の子が、丁寧に一人一人スパゲッティーのルーをかけてくれます。友達の顔を見ながら「多め？」「少なくする？」など、一人一人に合わせて入れてくれています。子どもたちは全員の給食が揃うまで結構な時間を待つことになり、それは評価項目では、減点対象になります。しかし、加菜先生はお当番の子どもが丁寧に一生懸命に入れてくれている姿を大切にする方を優先したと思いますし、子どもたちは、「ハングリー」と言いながらちゃんと待ってくれていました。これはせんりひじりでは評価に値すると思います。

埋橋教授も「測る」ことで「計り知れない」ことに気付いていけると話してくださいました。

今回、驚くほどの高得点でした。子どもにとっていいと思う環境や保育を追求していけば、評価点数もついてくるものだなと感じました。

園の中には「計れない力」があふれています。それをポートフォリオやドキュメンテーションや日頃の会話など様々な方法で可視化して、保護者の皆様に伝えていく努力を続けていきたいと思います。